

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2017～2022

課題番号：17KT0061

研究課題名(和文) 日常の相互行為における定型性：話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築

研究課題名(英文) Formulaicity in Everyday Interaction

研究代表者

鈴木 亮子 (SUZUKI, Ryoko)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・教授

研究者番号：50306859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,300,000円

研究成果の概要(和文)：人々は文法規則によってその都度文を生成するのではなく、多様な定型表現を駆使してコミュニケーションを行うことが近年主に英語に関して指摘されている。本研究では、英語に比して研究が十分ではない日本語を中心に、日常の言語使用としての話し言葉やネット上の相互行為を分析し、定型表現を中心とする資源と位置付けた言語知識・言語使用モデルを構築した。また、発話末表現、動詞表現や構文など多様な姿の定型表現が特定の社会行為・文脈と結びついて機能したり創発したりしていること、そして定型表現は単に言語だけでなく、音調や身体情報、ひいては読点などの記号も含めたものとして理解すべきであることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日常の話し言葉の分析から、従来の言語学で幅広く前提とされる「文法規則に基づいた新規文の生成」という言語モデルに変わるものとして、定型表現がより中心的な役割を果たす言語知識・言語使用モデルを提示した。定型表現は、単に固定化した周縁的表現ではなく、決まり文句から構文的なものまで幅広い形式レベルにわたって見られ、機能的にも相互行為の資源として多様な働きを担う。こうした事実を、日本語を対象とした研究を通してシンポジウムや学術誌投稿などを通して国際的に発信し、これまで英語中心であった知見を強化することができた。また、定型表現の実際の使用の研究は、第二言語教育などより広い研究領域にも示唆に富む。

研究成果の概要(英文)：It has been pointed out in recent years, mainly with regard to English, that people do not generate sentences according to grammatical rules each time, but rather communicate using a variety of formulaic expressions. In this study, focusing on Japanese, which has not been well studied compared to English, we analyzed spoken language and online interaction as daily language use, and constructed a model of linguistic knowledge and use that positions formulaic expressions as a central resource. Furthermore, the study revealed that various forms of formulaic expressions, such as utterance-final expressions, verb expressions, or syntactic constructions, function or emerge in connection with specific social actions and contexts, and that formulaic expressions should be understood as not only language but also include information regarding prosody and body and even symbols as punctuation marks.

研究分野：言語学

キーワード：相互行為 話し言葉 定型表現 創発 創造性 日本語 文法知識 書き言葉

1. 研究開始当初の背景

従来の言語学では、無限の文を生成・理解するための文法規則の探求のために、言語学者自らが作った例文(作例)を分析対象として理論を構築してきた。一方で、人間のコミュニケーションの最も根源的形態である自然な話し言葉、つまり日常の会話は、言語学における分析の対象としては長らく軽視されてきた。1990年代以降コンピューター技術の発展に伴い、大量のデータを扱うコーパス言語学や自然言語処理といった言語学の関連領域が発展してきたが、そこでもデータとなるのは主に書き言葉であった。また同じ頃から、録音録画機器の発達とともに、話し言葉を基盤として言語構造のシステムを再考する研究が徐々に増えたが、英語に関する研究が圧倒的に多く分野を牽引する状態は続いており、英語をはじめとする印欧語以外の言語の研究は不足している。

また、文法規則に従って私たちが「無限の文を生成・理解する」ことが従来の言語学における理論の基盤となってきたが、日常の言語使用においては、文はそのつど新規に生成されるのではなく、定型表現(決まり文句から構文的なものまで全体・または部分的に固定化した表現)の占める割合が大きいことが2000年以降、英語の研究を中心に指摘されはじめた(Wray 2012等)。しかし定型表現と言えば、主にことわざや慣用表現が取り上げられ、文法規則を主に取り扱う言語学からは例外的要素と見なされ、各言語を話す社会の文化を表すものとして扱われることが多かった。さらに、定型表現研究は第二言語教育の領域では関心が高いが、特に非印欧語において、自然な日常会話のデータを使って、実際の使用に基づいてその働きを明らかにする研究は、ほとんどなされてきていない。

2. 研究の目的

上記のような状況を背景に、本研究では、言語体系に見られる定型表現の役割という、従来言語学で顧みられてこなかった問題に、日本語を軸に中国語や英語も含めて複数の言語を視野に入れて、会話データを中心に分析に取り組むこととした。定型表現を社会的相互行為の資源として捉え、実際の使用に基づいてその働きを明らかにすることを研究の目的とした。具体的には、ビデオ撮影した会話データ(音声・ビデオ)を中心に分析し、定型表現が用いられる際の会話参加者の言語行動や非言語行動を含めて包括的に分析することとした。

言語教育においてコミュニケーションへの志向が高まっている現在、日常会話においてどのような定型表現がどのような場面でどのくらい使われているのかを明らかにすることは、日本語・英語・中国語各言語の記述ならびに教育に有益であると考えた。そのために、「オラリティと社会」という研究のキーワードを念頭におき、話し言葉を基盤として言語構造のシステムを再考することを最終的な目標とした。

3. 研究の方法

分析は、会話における文法研究の新領域として近年注目を集める相互行為言語学の手法(Thompson et al. 2015)を踏まえ、会話における相互行為を基盤として行った。データには会話をはじめとする、日常の相互行為を反映した素材(ビデオ撮影・録音した日常会話やインターネット上の話し言葉的な表現なども含む)の中で、比較的安定した頻度・パターンで出現する相互行為の連鎖に着目した。

定型表現の分類(表1)を出発点として、本研究では、これらの異なるタイプの定型表現が相互行為の中でどのように使われるのか、つまり定型表現が用いられる際の会話参加者のふるまいについて、言語行動、非言語行動を含めて包括的に分析を行った。

表1. 日本語における定型表現のタイプ(大野・鈴木(2015)を改訂)

定型表現のタイプ 例

- (1)決まり文句 「もしもし」「おかえんなさい」「ごめんなさい」「今いい?」
- (2)談話標識 「なんだろ」「なんていうの」「やっぱ」
- (3)末尾表現 「それ飲んだんだよ」「そんな感じだよ」「むかっとくるというかさあ」
- (4)反応表現 「あるある」「うそいえ」「ほら始まった」「そこまで言う」
- (5)語彙化 「この間」「そういうの」「知らない人」
- (6)コロケーション 「いっぱいある」「けっこうある」「深い悲しみに襲われた出来事」
- (7)構文 「なんの～なの?」「～てもらってたの?」「～てあげて?」「～のは…」
- (8)諺・慣用句 「帯に短し襷に長し」「河童の川流れ」

音声や動画を含めた文脈情報を分析に含めることで、言語を、他のモダリティとは独立したシステムとして扱うのではなく、現実の社会的環境の中で人間が取る行動を構成する要素としてより正確に理解することが可能となった。

言語の定型性に対する接近方法として、(i)話し言葉による相互行為の中での定型表現の分布と機能、(ii)定型表現を基盤とした言語生産メカニズム、(iii)言語表現の定型化を促す要因と環境、(iv)定型表現のタイプ間の相互関係、(v)相互行為を構成する資源としての「定型性」の役割を明らかにし、相互行為における言語構造・使用を記述・分析するためのモデル構築を目指した。

4. 研究成果

2017 年度(初年度)は「定型性研究の基礎固め」をテーマとして定型性の分析に向けての情報収集とアウトプットを行った。研究会合は全部で4回開催した。2017年9月のキックオフ会合では各メンバーの研究テーマ(特に定型性に絡めて)、研究進行予定を決め、午後から Marja-Liisa Helasvuo 氏、野村佑子氏、高梨博子氏を迎えてワークショップを行った。11月のワークショップでは定型表現の理論的枠組に関連して、海外協力者の Hongyin Tao 氏・高梨博子氏・土屋智行氏に発表して頂き、お互いに少しずつ異なる研究領域から言語の定型性とそれを踏まえて成立する言語の創造性への理解を深めた。

1月には定型表現研究の方法論に着目しながら、協力者の大野剛氏と鈴木のケーススタディ、そして言語処理の分野で日本語複単語表現辞書(JMWEL)を60年代から構築してきた首藤公昭氏の講演を通して定型表現の認定の問題に関して議論を行った。そして2月末には、「話しことばの言語学ワークショップ」の一環として、進捗発表会を公開で開催し、メンバーが発表を行いフィードバックを得た。多岐にわたるデータ(実験、歴史的コーパスデータ、自然会話の動画、電話会話の録音等)に見られる定型表現の振る舞いについて、聴衆と議論した。これらの会合は実施計画に従って順調に遂行され、多角的に段階的に言語の定型性に理解を深められたといえる。

2018 年度(2年目)もデータと向き合い個々のメンバーの専門性を生かした研究活動を進めることができた。5月26日に慶應義塾大学(三田)で第1回研究会合を開催し、まず同じ動画データ(大学生の会話)を見ながらメンバーそれぞれの定型性と言語使用に関する気付きを共有し合った後、個々のメンバーが日・中・英語のデータから短いセグメントを持ち寄り議論をし、定型性を分析する上でポイントになるリサーチクエスチョン(研究の切り口)のリストを作成した。そして計画通り9月には、カナダ・アルバータ大学での Referentiality(言語の指示性)をテーマにした国際会議の開催に関わり、チームから4名が発表を行い海外研究者と交流の機会を得た。一見定型性とは無関係に思われるが、指示表現の構造や会話における現れ方や位置、非言語的な側面を考える上でも、定型性を視野に入れることの有用性が確認でき貴重な機会となった。

12月に海外研究協力者の H.Tao 氏(UCLA)と大野剛氏(U of Alberta)を招聘し、東京外国語大学で国際ワークショップ(公開)を開催し、言語の定型性を中心に据えた理論化を見据えた発表を聞くことができた。2019年3月6日から7日にかけて九州大学で行った第3回目の会合では初日には質問や確認などの「働きかけ」に対する「応答」をテーマに先行研究の知見を検討し共通のデータを使って議論した。2日目には、本研究期間の折り返し点となるタイミングで、今までの研究会合での議論を振り返った。最終目標の一つである「文法知識のモデル化」に向けて、その難しさをメンバー間で共有するとともに、国際シンポジウムなどを通して研究成果をまとめてゆく方向性をも確認した。相互行為分析からは少し離れた立場の方たちを招いて言語の定型性に関する議論を深める案などが出された。1年後の3月には定型性研究の先鞭をつけた Alison Wray 氏をイギリスから招く方向を決め交渉したが、本人からお断りがあり計画を修正した。

2019 年度(3年目)は、雑誌論文出版、研究発表、図書の表が示すように国内・海外両方で、順調に実績を重ねられた。また研究会合は3回開催した。まず6月にはメンバー同士が「定型性と私」というテーマで原点に立ち返り、論文集出版に向けて全体像の構築を開始し(Formulaicity from/to language creation)、夏には論文の構想を示すアブストラクトを集めた。10月の会合では、最終年度の目標でもある理論化・論文集に向けて今後の活動の方向性を議論した。12月にはフィンランド Turku 大学の Helasvuo 教授と共に定型性と文法(特に指示性)との関わりを検討した。

2020年3月13日開催予定だったシンポジウムは、2月以降の COVID-19 の感染拡大のため残念ながら中止した。日常の話しことばに見られる定型性とその広汎さを伝えるべく具体的な研究例を準備し、その日の発表や議論を元にして論文集に生かす計画を立て、北米と九州大学から招聘講演者を4名、そしてプロジェクトチームのメンバー全員が講演とポスター発表を行うとい

う大規模なものを想定していた。「定型表現は周知的」と言っていた時代、「定型表現は当たり前（非常に多く見られる）」という今の時代を経て、次の時代の定型性研究に示唆を与えるような具体的な研究例を示すべく準備をしていたので、2020年度末にあらためて、シンポジウムの招聘予定者（UCLA Tao氏、Old Dominion Uの兼安氏、U of Albertaの大野氏）やUCSBのSandra Thompson氏）を招いて、集大成のシンポジウムを開催し論文集執筆につなげることを皆で確認した。

2020年度（4年目）もCOVID-19のため、様々な活動をすべてオンラインで行った。8月22日と29日の2回に分けて、オンラインで定型表現に関する国際研究会合を敢行したUCLAのTao教授、アルバータ大学のOno教授にも参加して頂き、定型表現と従来考えられてきたものの枠を超えてより広い捉え方（Prefab, 身体動作を含む表現）より新しいジャンル（含話しことば、SNS）などでメンバーが進めているプロジェクトについて発表し意見交換を行った。2020年8月より、定型表現研究に寄与する文献の集積リスト作りに着手した。最新の研究を届け、少し前の研究を掘り起こして紹介することを意図して、将来的に定型性に興味を持つほかの研究者にも利する形でまとめることを考えている。

2021年3月に国際シンポジウム(International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse)をオンラインで催行した。UCLAのTao教授、アルバータ大学のOno教授、そしてOld Dominion UniversityのKaneyasu教授の講演、そして午後には科研のメンバーが定型性の研究成果を一人15分ずつ紹介した。オンラインで100名近くが登録し、当日も常時、参加は6-70名であった。また、Journal of Japanese Linguistics (De Gruyter)という学術雑誌の特別号の枠に対して3月にプロポーザルを提出し、受理された。2021年度中に科研メンバーによる論文集（イントロ+7編論文）として原稿を取りまとめ2022年度刊行を目指すこととした。2020年度の学期中は各自オンラインの学務に追われ活動が滞った。それでも3月にはオンラインで国際シンポジウムを行い、特集号企画も通り、取りまとめに向けて成果が得られたことは良かった。

2021年度（5年目）は、2020年度に引き続き、COVID-19の深刻な影響を受け、研究会・学会発表・シンポジウムはすべてオンラインで行った。まず5月15日に研究会を行い、今年度を仕上げの年度と位置付け計画を立てた。Journal of Japanese Linguistics (De Gruyter社)という学術論文の特集号の完成に向けて、個々の論文を仕上げるために全員で意見交換の機会を持った。2022年度3月にはシンポジウムを行うことも確認した。8月9日・10日には、論文執筆のための中間発表会を行い、お互いのデータと分析について議論した。

2022年2月19日に再度研究会を開催し、3月のシンポジウム発表に向けて予行演習を行い当日の手順を確認した。そして年度末のまとめとして、3月9日に相互行為における定型性に関する国際シンポジウム(International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2022)を、海外の著名な研究者を招いてオンラインで催行した。招待発表2本（Sandra Thompson教授、Barbara Fox教授、Trine Heinemann氏 共同発表 Hongyin Tao教授）そして午後には当科研のメンバーがJLJ論文集に寄稿した研究の一部を紹介する形式をとった。オンラインで100名近くが登録し、当日も午前中は100名、午後参加は6-70名だった。一方で、プロジェクトの集大成と位置付けて準備してきたJournal of Japanese Linguistics 特集号（成果論文集）の原稿は、2022年3月末の時点で編集チームがチェックを行った。

本プロジェクトは日常会話における定型性をテーマに、COVID-19の影響による研究期間延長を2回更新し、6年間にわたる研究を行ってきた。**最終年度（2022年度）**は6月と9月に研究会合を行い、今後の研究の方向性と活動計画を話し合い、研究成果の発表と、成果論文集の刊行という2つの形でこのプロジェクトの社会還元を行うことを確認した。まず口頭での成果発表に関しては、2023年2月22日に、京都大学の定延利之教授を迎えて、International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2023（シリーズ3回目）をオンラインで開催した。今回は「定型性から出発するアプローチが、言語研究のありかたをどう変えるか」というテーマを設け、プロジェクトメンバーの発表4本、ゲストの講演、そしてディスカッションという3部構成で、終日60名前後の参加者とともに、従来の言語研究の前提（出発点）と定型性を中心とした言語の見方との違いや重なりに関して、発表事例に言及しつつ議論を深めた。

そして2023年2月24日には、プロジェクトメンバーで最終研究会合を行った。相互行為分析にPoetics（詩学）という切り口から研究されてきた愛知大学の片岡邦好教授をオンラインでお招きし、講演と実習をして頂いた。実際の日常の相互行為の中に詩的構造や繰り返しが顕著に見られることや定型性と創造性の複雑さに関する学びを得ることができプロジェクトの最終会合にふさわしい議論の機会を持つことができた。また、成果論文集の刊行が叶った。2021年度に執筆を進め、2022年度は改稿と校正作業を進め、最終的にはイントロダクションの章と7本の論文を取り纏めて、Journal 側に提出を済ませ、2023年5月5日にめでたくJournal of Japanese Linguistics (Mouton De Gruyter社) Volume 39, Issue 1として刊行することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計86件（うち査読付論文 58件 / うち国際共著 18件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Tao, Hongyin and Ryoko Suzuki	4. 巻 7(3)
2. 論文標題 The pragmatics of creative language use in East Asian languages: An Introduction	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics	6. 最初と最後の頁 297-305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.24315	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Suzuki, Ryoko	4. 巻 7(3)
2. 論文標題 Creativity in compliment responses in Japanese everyday talk	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics	6. 最初と最後の頁 365-394
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.24313	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Suzuki, Ryoko, Tsuyoshi Ono, and Saori Daiju	4. 巻 39
2. 論文標題 Verb repetition as a template for reactive tokens in Japanese everyday talk	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 3
2. 論文標題 子どもの発話における前置詞の響鳴率の異なり	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	6. 最初と最後の頁 116-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川正人・中村文紀・SPREADBURY Ash・堀内ふみ野・土屋智行	4. 巻 47
2. 論文標題 認知と社会のダイナミズムー創発・伝播・規範から読み解く言語現象の諸相ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会言語科学会第47回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 247-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 巻 3
2. 論文標題 変化・変異・進化の事実に向き合う種々の言語理論 必要なのは対立か, 対話か, 連携か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小川芳樹, 中山俊秀編 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3 』	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 148
2. 論文標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本音響学会第148回研究発表会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokomori, Daisuke and Tomoko Endo	4. 巻 196
2. 論文標題 Projective/retrospective linking of a contrastive idea: Interactional practices of turn-initial and turn-final uses of kedo 'but' in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 24-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2022.03.017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 38
2. 論文標題 「書評 - Nevalainen, Terttu, Minna Palander-Collin and Tanja Saily (eds.) Patterns of Change in 18th-Century English: A Sociolinguistic Approach, Amsterdam: John Benjamins (2018) 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近代英語研究』	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 1
2. 論文標題 「言語接触と文法化について 近現代日本語の「より」構文を事例として」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本語と近隣言語における文法化』 (青木博史・ナロック ハイコ (編) ひつじ書房)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 10
2. 論文標題 「定型表現研究と英語史」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『英語史における定型表現と定型性』 (渡辺拓人・柴崎礼士郎 (編) 開拓社) Studies in the History of the English Language 10.	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 10
2. 論文標題 「語用論標識 but the fact is that の定型化 - 後期近代英語と現代英語を中心に」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『英語史における定型表現と定型性』 (渡辺拓人・柴崎礼士郎 (編) 開拓社) Studies in the History of the English Language, 10	6. 最初と最後の頁 145-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijiro	4. 巻 39
2. 論文標題 "Formulaicity and formulaic expressions in Japanese: An introduction"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics (De Gruyter Mouton)	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijiro	4. 巻 1, 1, 2
2. 論文標題 "From comparative standard marker to comparative adverb: On the contact-induced (de)grammaticof yori in modern through present-day Japanese",	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Different slants on grammaticalizationalization	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijiro	4. 巻 -
2. 論文標題 "A little more thought to the decline of iwis: Analogy, reanalysis and obsoletism"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Linguistic and Stylistic Approaches to Speech, Thought and Writing in English (eds. by Osamu Imahayashi, Michiko Ogura and Yoshiyuki Nakao, Peter Lang)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takanashi, Hiroko	4. 巻 7
2. 論文標題 Language Reproduction and Coordinated Agency through Resonant Play	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics	6. 最初と最後の頁 395-423
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.23676	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野宏幸・高梨博子	4. 巻 -
2. 論文標題 クロノトボスの概念の活用による都市形成と対話的交流の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第37回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 271-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki	4. 巻 284
2. 論文標題 Establishing a pseudo-cleft construction in Japanese: A perspective from everyday conversation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Lingua	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.lingua.2022.103437	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi, Ritva Laury, and Ryoko Suzuki	4. 巻 -
2. 論文標題 On the notion of unit in the study of human languages	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/bct.114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Laury, Ritva, Tsuyoshi Ono and Ryoko Suzuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Questioning the clause as a crosslinguistic unit in grammar and interaction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units	6. 最初と最後の頁 123-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/bct.114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shibasaki, Reijiro	4. 巻 219
2. 論文標題 "Reanalysis and the emergence of adverbial connectors in the history of Japanese"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies at the Grammar-Discourse Interface: Discourse markers and discourse-related grammatical phenomena (eds. by Alexander Haselow and Sylvie Hancil,)	6. 最初と最後の頁 102-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.219.04shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「第4章：構文拡張と主観化の解釈について 英語史における the/my/_ question is の考察に基づいて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『構文と主観性』（天野みどり・早瀬尚子（編），くろしお出版）	6. 最初と最後の頁 75-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rhee, Seongha, REIJIROU SHIBASAKI, XINREN CHEN	4. 巻 Vol. 6 No. 3
2. 論文標題 "Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages: Introduction"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics Vol. 6 No. 3 (2021): Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages (Equinox)	6. 最初と最後の頁 271-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.21135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shibasaki, Reijiro	4. 巻 Vol. 6 No. 3
2. 論文標題 "Discourse markers in the making: Pragmatic differentiation of jijitsujoo from jijitsu in Modern through Present Day Japanese"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages	6. 最初と最後の頁 303-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.20921	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 21
2. 論文標題 会話は構文文法にどんな示唆を与えるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 427-432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野宏幸・高梨博子	4. 巻 -
2. 論文標題 外国人旅行者へのガイドツアーや応接におけるユーモアのある対話の分析 ホストとゲストの遊び心に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第36回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 121-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高梨博子	4. 巻 第24号
2. 論文標題 20世紀初頭の田中孝子の足跡 シカゴ大学の社会学、成瀬仁蔵、渋沢栄一との関連から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本女子大学『総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 98-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nakano, Hiroyuki, and Hiroko Takanashi	4. 巻 Vol. 14
2. 論文標題 Dialogic Formation of Tourism Strategies in Urban Renaissance Cities: Implications from Cases in Berlin, Budapest, and Santa Barbara	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Eastern Asia Society for Transportation Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷直輝、中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 用法基盤モデルの言語観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中山俊秀, 大谷直輝(編)『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 3-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷直輝、中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 認知言語学と談話機能言語学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中山俊秀, 大谷直輝(編)『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 27-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakayama, Toshihide and Horiuchi Fumino	4. 巻 172
2. 論文標題 Demystifying the development of a structurally marginal pattern: A case study of the wa-initiated responsive construction in Japanese conversation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 215-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2020.11.018	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野・中山俊秀	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 発話頭の「ハ」成立の動機付け 動的文法観に基づく一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『動的語用論の構築へ向けて』	6. 最初と最後の頁 176-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 -
2. 論文標題 隣接した発話間に見られる文法的構造の萌芽 子どもによる前置詞inの使用を例にして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 用法基盤モデルに基づく新展開 』	6. 最初と最後の頁 291-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 22
2. 論文標題 親子会話で生起する前置詞句単独発話	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『語用論研究』	6. 最初と最後の頁 74-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高梨博子	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 第8章「アイデンティティ・ワークとスタンスの多層性 からかいのプレイからー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『動的語用論の構築へ向けて』	6. 最初と最後の頁 148-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takanashi, Hiroko	4. 巻 -
2. 論文標題 Chapter 11 “Playful Naming in Playful Framing: The Intertextual Emergence of Neologism”	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bonding through Context: Language and Interactional Alignment in Japanese Situated Discourse	6. 最初と最後の頁 239-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Exploration into a new understanding of 'zero anaphora' in Japanese everyday talk	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Fixed Expressions: Building Language Structure and Social Action	6. 最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木亮子	4. 巻 -
2. 論文標題 新表現の創発 新しくない中にめっちゃ新しさ見えてるアピール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 用法基盤モデルに基づく新展開』	6. 最初と最後の頁 183-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko	4. 巻 172
2. 論文標題 The benefactive -te ageru construction in Japanese family interaction and adult interaction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 239-253
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2020.11.011_	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko, and Daisuke Yokomori	4. 巻 -
2. 論文標題 Self-addressed questions as fixed expressions for epistemic stance marking in Japanese conversation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ono, Tsuyoshi & Ritva Laury (eds.), Fixed expression in interaction: Building language structure and social action. Berlin: Mouton de Gruyter	6. 最初と最後の頁 203-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/pbns.315.08end	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijirou	4. 巻 26
2. 論文標題 From a clause combining conjunction to a sentence initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to totan(ni) at that moment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 26 (eds. by Shoichi Iwasaki, Susan Straussand and Shin Fukuda, Stanford: CSLI Publications)	6. 最初と最後の頁 347-358
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「(It/there is) no nay の歴史的推移と文法化の漸次性について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『中世英語英文学研究の多様性とその展望 吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集』(菊池清明・岡本広毅 編)	6. 最初と最後の頁 459-472
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「Wh分裂文と進行形の歴史的発達と融合について 情報連鎖の再構築と対人関係機能」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 用法基盤モデルに基づく新展開』	6. 最初と最後の頁 239-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Laury, Ritva, and Tsuyoshi Ono	4. 巻 -
2. 論文標題 Introduction	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Fixed Expressions: Building language structure and social action	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/pbns.315.011au	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi, and Sandra Thompson	4. 巻 -
2. 論文標題 What can Japanese conversation tell us about 'NP'?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The 'Noun Phrase' across Languages: An emergent unit in interaction	6. 最初と最後の頁 316-327
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/tsl.128.12ono	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thompson, Sandra A. and Tsuyoshi Ono	4. 巻 -
2. 論文標題 Introduction	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The 'Noun Phrase' across Languages: An emergent unit in interaction	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/tsl.128.01tho	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Laury, Ritva and Tsuyoshi Ono	4. 巻 3
2. 論文標題 Clause combining in interactional linguistics: A cross-linguistic perspective	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Interactional Linguistics and Chinese Language Studies	6. 最初と最後の頁 66-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Endo, Tomoko	4. 巻 -
2. 論文標題 Embodying stance: wo judee 'I think' and gaze	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Li, Xiaoting and Tsuyoshi Ono (eds.), Multimodality in Mandarin conversation	6. 最初と最後の頁 148-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤智子・高田明	4. 巻 -
2. 論文標題 家庭内の共同活動における子どもの指さしと養育者の反応	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編）『指さしと相互行為』	6. 最初と最後の頁 161-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijirou	4. 巻 -
2. 論文標題 "From Parataxis to Amalgamation: The emergence of the sentence-final is all construction in the history of American English"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kristin Bech and Ruth Mohlig-Falke (eds.), Grammar - Discourse - Context: Grammar and usage in language variation and change (De Gruyter Mouton)	6. 最初と最後の頁 171-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110682564	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「アメリカ英語における年代表記の変遷について イギリス英語と比較して」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小川芳樹（編）『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』（開拓社）	6. 最初と最後の頁 113-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「第7章 句読法の歴史的変化に見る動的語用論の可能性 - イギリス英語のfull stopを中心に -」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて1』（開拓社）	6. 最初と最後の頁 144-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「第4章 句読法から語用論標識へ Periodの談話機能の発達と今後のアメリカ英語について」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 住吉誠・鈴木亨・西村義樹（編）『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』（開拓社）	6. 最初と最後の頁 54-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴崎礼士郎	4. 巻 -
2. 論文標題 「監訳者解説（Bybee 2015）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小川芳樹・柴崎礼士郎（監訳）『言語はどのように変化するのか』（Joan Bybee, Language change, Cambridge, Cambridge UP, 2015）	6. 最初と最後の頁 400-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 -
2. 論文標題 「通じる」ためのリソースとしての文法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会第44回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 307-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakano, Hiroyuki; Takanashi, Hiroko	4. 巻 12
2. 論文標題 The Interactive Creation of Local Identity in Tourist Visiting Cities: A Comparative Study of Nara, Bologna, and Santa Barbara	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the Eastern Asia Society for Transportation Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野宏幸・高梨博子	4. 巻 22
2. 論文標題 第59回運輸政策セミナー「インバウンド観光と対話・コミュニケーション」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 運輸政策研究	6. 最初と最後の頁 157-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高梨博子	4. 巻 -
2. 論文標題 観光の詩的パフォーマンス：日米欧の都市の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『ことばの詩 生活の詩 社会の詩 日常の中のポエティクス』（愛知大学人文社会学研究所主催シンポジウム報告書）	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 19
2. 論文標題 対話から文法へ：overの習得を支える多層的な文脈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 311-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野・中山俊秀	4. 巻 2
2. 論文標題 発話頭の「ハ」成立の動機付け：動的文法観に基づく一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『動的語用論の構築へ向けて』	6. 最初と最後の頁 176-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 3
2. 論文標題 その焼豚がまたおいしいんだぞさ：「また」の属性累加用法の談話文法的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本語語用論フォーラム』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内ふみ野	4. 巻 37
2. 論文標題 子どもの前置詞句単独発話：談話的文脈と前置詞ごとの相違の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi, Ritva Laury, and Ryoko Suzuki	4. 巻 43
2. 論文標題 On the notion of unit in the study of human languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units Studies in Language Special Issue	6. 最初と最後の頁 245-253
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/sl.00014.int	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Laury, Ritva, Ono Tsuyoshi, and Suzuki Ryoko	4. 巻 43
2. 論文標題 Questioning the clause as a crosslinguistic unit in grammar and interaction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units Studies in Language Special Issue	6. 最初と最後の頁 364-401
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/sl.17032.lau	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木亮子・大野剛	4. 巻 -
2. 論文標題 認知形態論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『認知言語学大辞典』	6. 最初と最後の頁 94-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 18
2. 論文標題 言語知識はどのような形をしているのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 580-585
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 Agreeing in overlap: A comparison of response practices and resources for projection in Finnish, Japanese and Mandarin talk-in-interaction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 160-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.21.1_160	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shibasaki, Reijirou	4. 巻 SLCS198
2. 論文標題 "Sequentiality and the emergence of new constructions: That's the bottom line is (that) in American English"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Explorations in English Historical Syntax	6. 最初と最後の頁 283-306
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.198.12shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shibasaki, Reijirou	4. 巻 SLCS202
2. 論文標題 "From the inside to the outside of the sentence: Forming a larger discourse unit with jijitsu 'fact' in Japanese"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 New Trends in Grammaticalization and Language Change	6. 最初と最後の頁 333-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.202.14shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko	4. 巻 123
2. 論文標題 The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 151-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2017.06.010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 智子、横森 大輔、林 誠	4. 巻 20
2. 論文標題 確認要求に用いられる感動詞的用法の「なに」 認知的スタンス標識の相互行為上の働き	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 100-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.20.1_100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokomori, Daisuke, Yasui Eiko, and Hajikano Are	4. 巻 123
2. 論文標題 Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne -marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 167-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2017.06.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 1
2. 論文標題 認知的スタンスの表示と相互行為プラクティス：「やっぱり」が付与された極性質問発話	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』	6. 最初と最後の頁 113-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 36(4)
2. 論文標題 言い淀み・フィラー・母音延伸	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 140-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakayama, Toshihide	4. 巻 1
2. 論文標題 Polysynthesis in Nuuchahnulth, A Wakashan Language	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 In: Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.) The Oxford Handbook of Polysynthesis. Oxford: Oxford University Press.	6. 最初と最後の頁 603-622
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山俊秀	4. 巻 18
2. 論文標題 言語知識はどのような形をしているのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野剛、中山俊秀	4. 巻 1
2. 論文標題 文法システム再考：話しことばに基づく文法研究に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』	6. 最初と最後の頁 5-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 土屋智行	4. 巻 1
2. 論文標題 網羅的なパターン束分析からみる構文の状況依存性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語処理学会第24回年次大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 584-587
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋智行	4. 巻 17
2. 論文標題 参加者をつなぐメディアと身体性 手法と展開	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 465-471
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木亮子	4. 巻 1
2. 論文標題 話しことばに見る言語変化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』	6. 最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki	4. 巻 123
2. 論文標題 The use of frequent verbs as reactive tokens in Japanese everyday talk: Formulaicity, florescence, and grammaticization	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 209-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2017.07.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Endo, Tomoko	4. 巻 39
2. 論文標題 Sequential positions and interactional functions of negative epistemic constructions in Japanese conversation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 37-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokomori, Daisuke	4. 巻 39
2. 論文標題 Kedo-ending turn format as a formula for a problem statement with a deontic implication	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 59-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Horiuchi, Fumino and Toshihide Nakayama	4. 巻 39
2. 論文標題 Commas as a constructional resource: the use of a comma in a formulaic expression in Japanese social media texts	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuchiya, Tomoyuki	4. 巻 39
2. 論文標題 Formulaicity of fictional quotative ga itteta and its functions in Japanese social media posts	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 125-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takanashi, Hiroko	4. 巻 39
2. 論文標題 The utterance-final tari site construction in interaction: a general extender as a play stance marker	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 81-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2023-2007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計138件 (うち招待講演 32件 / うち国際学会 74件)

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "Diachronic aspects of what matters is in American English and issues concerning grammaticalization"
3. 学会等名 2022 Seoul International Conference on Linguistics (SICOL-2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "Thoughts race through my mind: Discourse-pragmatic markers in Japanese from the perspective of East Asian languages and beyond"
3. 学会等名 Workshop: Discourse Grammar and Formation of Discourse Markers (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nykiel, Jerzy N. & Reijirou Shibasaki
2. 発表標題 "On the rise and fall of (it/there) is no nay in the history of English"
3. 学会等名 The Colloque Bisannuel de la Diachronie de l' Anglais 7 (CBDA-7) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "(De)grammaticalization in Japanese through language contact with European languages"
3. 学会等名 Linguistics and Data Science in Collaboration DaSiC 6 (2022) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "On the role of writing systems in the process of grammaticalization"
3. 学会等名 The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK30) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takanashi, Hiroko
2. 発表標題 The Interactional Performance and Authentication of Tourism Experience
3. 学会等名 The 3rd International Conference on Sociolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 クノトボスの概念の活用による都市形成と対話的交流の分析
3. 学会等名 第37回日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高梨博子
2. 発表標題 ことばの創造性と話し手の行為主体性 言語形式と共感の響鳴をめぐって
3. 学会等名 Formulaicity in Interaction 2023「定型性から出発するアプローチが、言語研究のありかたをどう変えるか」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 国内外都市における観光の取組 対話を通じた都市の魅力の創出
3. 学会等名 小田原・箱根SGGクラブ1月例会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堀内ふみ野・土屋智行
2. 発表標題 [X、なN]にみる 構文のモード依存性
3. 学会等名 社会言語科学会第47回研究大会 ワークショップ「認知と社会のダイナミズム 創発・伝播・規範から読み解く言語現象の諸相」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堀内ふみ野・中山俊秀・土屋智行
2. 発表標題 打ち言葉の逸脱的表現から見る定型化
3. 学会等名 Formulaicity in Interaction 2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 言語モードのデータ間比較に向けて：収集手法と音声データの比較
3. 学会等名 Formulaicity in Interaction 2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 相互行為の中のプロソディ
3. 学会等名 社会言語科学会第4回シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 文法体系の拡張：逸脱構文の発達事例から考える
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第2回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川正人・中村文紀・PREADBURY Ash・堀内ふみ野・土屋智行
2. 発表標題 認知と社会のダイナミズム 創発・伝播・規範から読み解く言語現象の諸相
3. 学会等名 第47回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中川奈津子・大野剛
2. 発表標題 日本語の名詞修飾節 - 会話における構造と使用
3. 学会等名 Formulaicity in Interaction 2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白田泰如・大野剛
2. 発表標題 日常会話における「動詞で終わる発話」の特徴 - 「違う」を例に
3. 学会等名 「日常会話コーパス」シンポジウムVIII
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi
2. 発表標題 Trying to capture Japanese grammar in conversation
3. 学会等名 East Asian Languages and Cultures, Stanford University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Laury, Ritva and Tsuyoshi Ono
2. 発表標題 Ending or not ending “neverending sentences” in Finnish and Japanese conversation: syntax, semantics, prosody and interaction
3. 学会等名 Mina ja muut: A scholar in the making, University of Tartu, Estonia (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi
2. 発表標題 Japanese are, reference, and bodily movement
3. 学会等名 多世代会話コーパスプロジェクト、ショートトークの会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀内ふみ野・中山俊秀
2. 発表標題 ただの読点、だけどね：構文構成要素としての読点
3. 学会等名 日本語学会第162回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Horiuchi, Fumino
2. 発表標題 What kinds of prepositions are acquired through resonance?
3. 学会等名 11th International Conference on Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide and Fumino Horiuchi
2. 発表標題 'Structural incompleteness' as a communicative strategy: What motivates utterances starting in the middle?
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takanashi, Hiroko
2. 発表標題 Poetic Performance in Walking Tour Discourse
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakano, Hiroyuki and Hiroko Takanashi
2. 発表標題 The Dialogic Formation of Tourism Strategies in Urban Renaissance Cities: Implications from the Cases in Berlin, Budapest, and Santa Barbara
3. 学会等名 The 14th International Conference of Eastern Asia Society for Transportation Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高梨博子・中野宏幸
2. 発表標題 渋沢栄一にみる異文化接触とコミュニケーション
3. 学会等名 日本国際観光学会第25回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 外国人旅行者へのガイドツアーや応接におけるユーモアのある対話の分析 ホストとゲストの遊び心に着目して
3. 学会等名 第36回日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高梨博子
2. 発表標題 相互行為における発話末の「～たりして」 遊びのスタンス標識としてのgeneral extender
3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 用法基盤アプローチが関心を向ける「語」のリアリティ
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2021年度第2回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide and Fumiko Horiuchi
2. 発表標題 'Structural incompleteness' as a communicative strategy: What motivates utterances starting in the middle?
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 『周辺の』文法パターンは文法研究をどのように広げてくれるのか
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 扱いにくいデータが教えてくれること：逸脱的構文が明らかにする文法システムの文脈依存性
3. 学会等名 AA研フォーラム：『アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀内ふみ野，中山俊秀
2. 発表標題 ネタさえあれば、だけどね：読点を含めた定型表現研究の可能性
3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "On the development of the projector the chances are that in American English: A constructional approach"
3. 学会等名 The International Society for the Linguistics of English 6 (ISLE6 online, Theme: Evolving English and the Digital Era) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 "Thoughts on formulaic expressions in English in a cross-linguistic perspective"
3. 学会等名 Norwegian Graduate Researcher School in Linguistics and Philology (online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「適者生存? 二重最上級 bestest と worstest から考察する近現代英語」
3. 学会等名 「近代英語協会第 38 回大会Zoom コンファレンス・シンポジウム「周辺表現はどのように英語標準化時代を生き抜いたのか 3つの事例から考える」」(司会兼発表)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Laury, Ritva, and Tsuyoshi Ono
2. 発表標題 Complex syntax in Finnish and Japanese
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thompson, Sandra A. and Tsuyoshi Ono
2. 発表標題 What do speakers do with Predicate Nominal Constructions in English conversation?
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野剛
2. 発表標題 日常会話から日本語を眺めてみよう
3. 学会等名 第5回 HiSoPra*研究会 (歴史社会言語学・歴史語用論研究会) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi and Ritva Laury
2. 発表標題 Sentence bias in the analysis of 'co-construction' in Japanese conversation
3. 学会等名 より豊かな言語研究をめざす会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi and Ritva Laury
2. 発表標題 Sentence bias in the analysis of 'co-construction' in Japanese conversation
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Laury, Ritva and Tsuyoshi Ono
2. 発表標題 Co-construction reconsidered: over-syntacticization in Interactional Linguistics
3. 学会等名 4th International Conference on Interactional Linguistics and Chinese Language Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 De-ritualization as management of social roles: Multimodal analysis of ritual language and bodily behavior
3. 学会等名 International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 SNS上の定型表現の創造的拡張：語順のスクランプリングに着目して
3. 学会等名 Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yokomori, Daisuke
2. 発表標題 Formulaic utterances as resources for the pragmatic function of noun-modifying reported speeches in English
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Suzuki, Ryoko
2. 発表標題 Is the copula for the equation?: Copula da and the related patterns in Japanese everyday talk.
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木亮子、大野剛、第十早織
2. 発表標題 動詞の繰り返しから reative tokenへ
3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木亮子
2. 発表標題 「いやいや」：ほめへの応答パターン
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日常会話コーパス」ポスターセッション
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大野剛、鈴木亮子
2. 発表標題 会話の行けるPseudo-cleftってこっちじゃない？
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日常会話コーパス」ポスターセッション
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀内ふみ野
2. 発表標題 子どもの前置詞産出における響鳴率の異なり
3. 学会等名 言語変化・変異研究ユニット主催 第6回ワークショップ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀内ふみ野・中山俊秀
2. 発表標題 「ネタさえあれば、だけどね」 読点を含めた定型表現研究の可能性
3. 学会等名 Online International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山俊秀・堀内ふみ野
2. 発表標題 発話を超えて発達した定型性 係助詞八で始まる発話
3. 学会等名 Online International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 対話原理に基づくインバウンドディスコースにおける視座の分析 ボランティアガイド活動におけるホストとゲストの行動に着目して
3. 学会等名 日本観光研究学会第35回全国大会研究ワークショップ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高梨博子
2. 発表標題 遊びの相互行為における言葉の共創 定型性と新奇性の観点から
3. 学会等名 International Symposium "Formulaicity in Interactional Discourse" (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木亮子
2. 発表標題 新表現の創発 新しくない中にある新しさ
3. 学会等名 International Symposium “Formulaicity in Interactional Discourse” (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Body-language collaboration in object transfer requests in Japanese conversation
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "Pronominal vs. nominal forms of direct object in Late Modern through Present Day English"
3. 学会等名 More thoughts on (in)transitivity and related issues inThe 92nd Annual Conference of English Literary Society of Japan (ELSJ-92) Web Conference (日本英文学会第92回全国大会ウェブカンファレンス) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 "Some notes on the emergence of full stop as a pragmatic marker in the history of British English"
3. 学会等名 2020 International Conference on English Linguistics (Kyung Hee University, Seoul [online]), org by The Korean Association for the Study of English Language and Linguistics (KASELL) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「たしかに」の談話機能と定型性について
3. 学会等名 International symposium “Formulaicity in interactional discourse”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 会話は構文文法にどんな示唆を与えるか
3. 学会等名 日本認知言語学会第21回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 語り連鎖における「ってゆう」発話の働き
3. 学会等名 International symposium “Formulaicity in interactional discourse” (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tsuchiya, Tomoyuki
2. 発表標題 Extracting and Analyzing English Multi-word Expressions with Slots: A Case Study of 'take'
3. 学会等名 言語処理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi
2. 発表標題 Toward understanding the language of Japanese everyday talk: Inconspicuous yet pervasive formulaicity
3. 学会等名 Online International Symposium 'Formulaicity in interactional discourse' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tsuchiya, Tomoyuki
2. 発表標題 Imaginary Situation in Japanese SNS Quotes: The Case of "A High School Girl in McDonald's" and "Carl Loffler"
3. 学会等名 Workshop on Formulaicity and Referentiality in Discourse (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 言語の慣習性を中心とした言語研究の手法と展開
3. 学会等名 日本言語教育ICT学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Membership and participation: Child as a resource for interaction between in-laws in Japanese casual conversation
3. 学会等名 The 15th meeting of International Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Bodily behavior as constructional meaning: The case of benefactive construction in Japanese family interaction
3. 学会等名 The 15th meeting of International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 認識動詞を用いた話し手の態度表明：認識的モダリティと認識的スタンス
3. 学会等名 第37回 日本英語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉：イントロダクション
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 統語変化と主観化の解釈について - 英語史における the/my/0 question is の考察に基づいて -
3. 学会等名 2019年度 構文研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 Another look at formulaicity: The case of the bottom line is (that) in British and American English
3. 学会等名 Workshop on Formulaicity and Referentiality in Discourse (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 言語接触と文法化について 近現代語の比較構文を事例として
3. 学会等名 第4回 日本語と近隣言語における文法化
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 The question remains is whether constructions are in the making: Constructionalization in Present-day American English
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15, Kwansai Gakuin University, Nishinomiya, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 The fact remains is that spontaneity and sequentiality account for the amalgamation
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 From punctuation to pragmatic marker, period: Written language as a source of language change
3. 学会等名 Dictionary Society of North America 22 / Studies in the History of the English Language 11 (Indiana University, Bloomington) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide and Fumino Horiuchi
2. 発表標題 Dynamic emergence of referents in conversation
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Reexamining the Complexity of Collaboration in Documentation and Revitalization Research
3. 学会等名 International Interdisciplinary Conference 2019 "On the Move: Indigenous Knowledge, Language and Culture, Tourism and Creative Economy in Asia and Beyond" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 言語創発学への道のり
3. 学会等名 第16回 話しことばの言語学ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 ヌートカ語（カナダの消滅危機先住民言語）の魅力と深み - ちょっと「想定外」の文法を楽しむ
3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニット講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 言語の類型化の面白みと落とし穴
3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニットチュートリアル（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山俊秀, 伝康晴, 細馬宏通, 木村大治
2. 発表標題 言語創発学の試みー言語の個人基盤と社会性をつなげるインターフェイスの解明に向けてー
3. 学会等名 社会言語科学会第44回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 多様な個人の多様な文法がまとまるメカニズムを考える
3. 学会等名 「文法の動的体系性を探る (1)：文法の多重性と分散性」2019年度第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yokomori, Daisuke
2. 発表標題 When to withhold a reference to a head noun: a study of turn-final use of the complementizer <i>toiu/tteyuu</i> in Japanese conversation
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木亮子
2. 発表標題 会話における繰り返し：動的なスタンス構築
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ono, Tsuyoshi and Sandra Thompson
2. 発表標題 Reference as a dynamic and fluid phenomenon in conversation
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daiju, Saori and Tsuyoshi Ono
2. 発表標題 A study of Japanese question words in specifying and telling questions: <i>nani</i> and post-positional grammatical particles
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conferenc (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takanashi, Hiroko
2. 発表標題 Emergent Parallelism in Walking Tour Discourse with International Tourists
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakano, Hiroyuki and Takanashi Hiroko
2. 発表標題 The Interactive Creation of Local Identity in Tourist Visiting Cities: A Comparative Study of Nara, Bologna, and Santa Barbara
3. 学会等名 The 13th International Conference of the Eastern Asia Society for Transportation Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 観光地域のアイデンティティのミクロ的基礎とマクロとの相互循環 海外都市の「街の再発見のアプローチ」に着目して
3. 学会等名 日本交通学会第78回研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高梨博子
2. 発表標題 観光場面の対話におけるスタンス行為
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高梨博子
2. 発表標題 観光の詩的パフォーマンス：日米欧の都市の事例から
3. 学会等名 愛知大学人文社会学研究所シンポジウム「ことばの詩、生活の詩、社会の詩 日常の中のポエティックス」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野宏幸・高梨博子
2. 発表標題 インバウンド旅行者との対話・コミュニケーション 共感、そして、楽しみの創出
3. 学会等名 小田原・箱根SGGクラブ12月例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀内ふみ野
2. 発表標題 子どもの前置詞句単独発話：談話的文脈と前置詞ごとの相違の観点から
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Reflections on working with an endangered language community in Japan
3. 学会等名 Third International Conference on Documentary Linguistics - Asian Perspectives（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Problematizing language and revitalization: Why language documentation hits a wall in revitalization
3. 学会等名 International Symposium on Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Reframing referentiality in interaction: From 'pointing' to 'synchronized attention'
3. 学会等名 International Workshop on Referentiality (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Different ways of contributing to conservation and revitalization of language and culture
3. 学会等名 Workshop on Conservation and Revitalization of Community Language and Culture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Multiplicity in grammar: How do we need to change the way we think about grammar?
3. 学会等名 Japanese/Korean Conference: Pre-conference workshop on Multiplicity in Language and Multiple Grammars (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen, and Daisuke Yokomori
2 . 発表標題 Cross-linguistic investigation of projection in overlapping agreements to assertions
3 . 学会等名 The 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Chen, Li, & Daisuke Yokomori
2 . 発表標題 Display of understanding by understanding check: A study of Japanese utterance-final use of the quotative particle TO
3 . 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Yokomori, Daisuke
2 . 発表標題 Problem statements with KEDO in Japanese talk-in-interaction
3 . 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen, and Daisuke Yokomori
2 . 発表標題 Two levels of projection: cross-linguistic investigation of agreeing overlapping response
3 . 学会等名 The 3rd International Conference on Interactional Linguistics and Chinese Language Studies (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 談話標識への会話分析的アプローチ：情報を受けとめる reallyを中心に
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第71回大会，シンポジウム第3部門（英語学）『談話標識研究へのアプローチ』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 Flexibility of temporal nouns in Japanese: With special reference to shunkan '(at the moment)'
3. 学会等名 Referentiality Workshop (University of Alberta, Canada) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 From a clause-combining conjunction to a sentence-initial adverbial connector in the history of Japanese: With special attention to totan(-ni) 'at the moment'
3. 学会等名 The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK26) (University of California at Los Angeles (UCLA), Nov 29 to Dec 1, 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 文頭副詞「とたん(に)」に関する一考察
3. 学会等名 「第3回 日本語と近隣言語における文法化ワークショップ (GJNL-3)」(東北大学川内南キャンパス)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijirou
2. 発表標題 From nominal predicates pragmatic markers in the history of Japanese With special reference to East Asian languages (Plenary lecture)
3. 学会等名 International Conference on Current Trends in Linguistics (CTL) (University of Reuen (Université de Rouen) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 文頭に出現するMWEの談話標識らしさ
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第71回大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuchiya, Tomoyuki
2. 発表標題 Euphemistic Use of NPs in Japanese Proverbs
3. 学会等名 Referentiality Workshop (University of Alberta) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuchiya, Tomoyuki
2. 発表標題 Processing Conventionalized Sequences
3. 学会等名 No.150 Shonan Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Ancestor or Grandpa: Referential forms in Japanese household shinto ritual
3. 学会等名 Referentiality Workshop (University of Alberta) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤智子・高田明
2. 発表標題 子ども養育者相互行為における活動の中の指さし
3. 学会等名 社会言語科学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 参与構造の類型について：日常会話コーパスを用いたボトムアップのアプローチ
3. 学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス IV』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Suzuki, Ryoko
2. 発表標題 Referentiality in Predicate Nominals in Japanese Conversation
3. 学会等名 Referentiality Workshop (University of Alberta) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 亮子
2. 発表標題 反応表現のさまざまな姿
3. 学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス IV』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Suzuki, Ryoko
2. 発表標題 Question tags and response particles in Japanese interactions are quite regular... or are they?
3. 学会等名 DFG Scientific Network Meeting “ Interactional Linguistics- Discourse particles from a cross-linguistic perspective.”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 中国語を対象とする機能主義言語学・会話分析の展開
3. 学会等名 第7回名古屋大学大学院人文学研究科 言語学分野公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 中国語のクリックと参与スタンス
3. 学会等名 第7回動的語用論研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 参与構造の創発に関わる諸要因の整理に向けて
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパスIII」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Infant's pointing and participation framework
3. 学会等名 The 1st Seminar on the Development of Intersubjective Recognition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Endo, Tomoko and Yokomori Daisuke
2. 発表標題 Interactional functions of verbalizing troubles: Self-addressed questions in Japanese conversation
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 The Benefactive -te ageru Construction in Japanese Child-caregiver Interaction
3. 学会等名 International Pragmatics Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Korenaga, Ron, Ippei Mori, Tomoko Endo, Satoru Ikegami, Kei Aoyama, Akio Tomita, Yoko Morimoto, Asako Ohara
2. 発表標題 Practice of learning through children-caregiver interaction: A case of cleaning-up activity
3. 学会等名 International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mak Suyin, Hiroko Nishida & Daisuke Yokomori
2. 発表標題 Playing with Metaphors: A cross-cultural study of string quartet rehearsal communication in Hong Kong and Japan
3. 学会等名 Society for Ethnomusicology 62nd Annual Meeting (国外) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 陳力、横森大輔
2. 発表標題 会話における「と文末」を用いた理解確認
3. 学会等名 第40回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西田紘子、横森大輔
2. 発表標題 室内楽の練習場面におけるメタファー表現の使用：概念領域と身体動作の傾向を中心に
3. 学会等名 日本認知科学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 グループ(ワーク)の創発とリスナーシップ
3. 学会等名 第129回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 会話におけるトラブルへの言及と発話フォーマット
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス III」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakayama, Toshihide
2. 発表標題 Fluctuating robustness of nominal phrases in Nuuchahnulth
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 言語知識はどのような形をしているのか
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀内ふみ野、中山俊秀
2. 発表標題 会話から見る文法体系の多重性：日本語の日常会話を例にして
3. 学会等名 第6回動的語用論研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山俊秀
2. 発表標題 会話に見られる言語表現の文法的特異性
3. 学会等名 日本英語学会第35回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shibasaki, Reijiro
2. 発表標題 On the Rise of douride 'no wonder' as a Projector and the Reformulation of Discourse Sequential Relations in Japanese
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (Honolulu, Hawai'i) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柴崎礼士郎
2. 発表標題 「述部から創発する独立型表現に関する予備的研究 近現代日本語の「道理で」を事例として - 」
3. 学会等名 話しことばの言語学ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 網羅的なパターン束分析からみる構文の状況依存性
3. 学会等名 言語処理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土屋智行
2. 発表標題 言語環境に応じた言語知識の活性化
3. 学会等名 日本英語学会第35回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木亮子
2. 発表標題 ぎざじゅうアピール：言語の定形性と創造性
3. 学会等名 名古屋大学言語学分野公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Suzuki, Ryoko
2. 発表標題 Predicate-centered view of NPs: A case study in Japanese conversation
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計26件

1. 著者名 Tao, Hongyin and Ryoko Suzuki	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Equinox	5. 総ページ数 196
3. 書名 The pragmatics of creative language use in East Asian languages, Special Issue of East Asian Linguistics	
1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 445
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3	
1. 著者名 渡辺拓人・柴崎礼士郎(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 189
3. 書名 『英語史における定型表現と定型性』	
1. 著者名 Tsuchiya, Tomoyuki, Reijirou Shibasaki, Ryoko Suzuki and Tsuyoshi Ono (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 160
3. 書名 Formulaicity in Japanese interactional discourse Special issue of Journal of Japanese Linguistic, 39	

1. 著者名 高梨博子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 『ポエティクスの新展開 プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて』片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士（編）, 分担, 「観光のエスノポエティクス 並行性と響鳴による詩的实践」	

1. 著者名 Horiuchi, Fumino	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Hituzi Syobo	5. 総ページ数 224
3. 書名 English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics	

1. 著者名 Takanashi, Hiroko	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 248
3. 書名 Language and Intercultural Communication in Tourism: Critical Perspectives	

1. 著者名 Haselow, Alexander and Sylvie Hancil (editors), Reijirou Shibasaki (Chapter 4)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 354
3. 書名 Studies at the Grammar-Discourse Interface: Discourse markers and discourse-related grammatical phenomena	

1. 著者名 天野みどり・早瀬尚子（編），柴崎礼士郎（第4章）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 『構文と主観性』	

1. 著者名 Rhee, Seongha, Reijirou Shibasaki, Xinren Chen (Introduction), Xiao He, Reijirou Shibasaki, Seongha Rhee, Yuko Higashiizumi, Keiko Takahashi, Sujin Eom, Seongha Rhee, Hyun Sook Lee	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Equinox	5. 総ページ数 151
3. 書名 East Asian Pragmatics Vol. 6 No. 3 (2021): Special Issue: Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages	

1. 著者名 内田諭・大賀哲・中藤哲也（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 知を再構築する 異分野融合研究のためのテキストマイニング	

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi, Ritva Laury, and Ryoko Suzuki	4. 発行年 2021年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 204
3. 書名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units	

1. 著者名 Suraratdecha, Sumittra and Toshihide Nakayama	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 122
3. 書名 Documentary Linguistics: Working with Communities	

1. 著者名 中山俊秀, 大谷直輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 395
3. 書名 認知言語学と談話機能言語学の有機的接点：用法基盤モデルに基づく新展開	

1. 著者名 Laury, Ritva and Tsuyoshi Ono	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 238
3. 書名 Fixed Expressions: Building language structure and social action	

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi and Sandra Thompson	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 366
3. 書名 The 'Noun Phrase' across Languages: An emergent unit in interaction	

1. 著者名 土屋智行	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 131
3. 書名 言語と慣習性 -ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態	

1. 著者名 Li, Xiaoting and Tsuyoshi Ono	4. 発行年 2019年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 335
3. 書名 Multimodality in Chinese Interaction	

1. 著者名 ジョン・バイビー（著）、小川芳樹、柴崎礼士郎（監訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 言語はどのように変化するのか	

1. 著者名 Ono, Tsuyoshi, Ritva Laury and Ryoko Suzuki	4. 発行年 2019年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 253
3. 書名 Usage-based and Typological Approaches to Linguistic Units (Studies in Language, Special Issue)	

1. 著者名 村田 和代	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 聞き手行動のコミュニケーション学	

1. 著者名 平本毅, 横森大輔, 増田将伸, 戸江哲理, 城綾実 (編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 286
3. 書名 会話分析の広がり	

1. 著者名 Cuyckens, Hubert, Hendrik De Smet, Leisbet Heyvaert, and Charlotte Maekelberghe. (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 312
3. 書名 Explorations in English Historical Syntax	

1. 著者名 Hancil, Sylvie, Tine Breban and Jose Vincente Lozano (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 433
3. 書名 New Trends in Grammaticalization and Language Change	

1. 著者名 土屋智行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 152
3. 書名 異分野融合研究のためのテキストマイニング: 基礎と実践	

1. 著者名 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 話しことばへのアプローチ 創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	遠藤 智子 (Endo Tomoko) (40724422)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	中山 俊秀 (Nakayama Toshihide) (70334448)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	
研究分担者	横森 大輔 (Yokomori Daisuke) (90723990)	京都大学・国際高等教育院・准教授 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土屋 智行 (Tsuchiya Tomoyuki) (80759366)	九州大学・言語文化研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	柴崎 礼士郎 (Shibasaki Reijiro) (50412854)	明治大学・総合数理学部・専任教授 (32682)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高梨 博子 (Takanashi Hiroko) (80551887)	日本女子大学・文学部英文学科・教授	
研究協力者	堀内 ふみ野 (Horiuchi Fumino) (80827535)	大東文化大学・経済学部社会経済学科・講師	2023年4月より日本女子大学文学部英文学科准教授
研究協力者	大野 剛 (Ono Tsuyoshi)	アルバータ大学(カナダ)・Faculty of Arts, East Asian Studies Department・Professor	
研究協力者	陶 紅印 (Tao Hongyin)	カリフォルニア大学ロサンゼルス校(米国)・Department of Asian Languages & Cultures・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2022	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse	開催年 2021年～2021年

国際研究集会 Fixed Expressions Workshop	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse 2023	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	University of California, Los Angeles			
フィンランド	University of Helsinki			
カナダ	University of Alberta			
フィンランド	University of Turku			